

第二回中間報告
(2015年12月19日～3月31日)

国際ロータリー第2710地区
2015-2016年度 グローバル補助金奨学生
藤村 武蔵

1. 報告書提出日：2015年4月28日 第2回報告
2. 基本情報
 - ・氏名：藤村武蔵
 - ・派遣ホストクラブ及びカウンセラー：岩国中央ロータリークラブ、Mr Hidenori FUJISHIGE
 - ・受入ホストクラブ及びカウンセラー：Edgware and Stanmore Rotary Club, Ms. Maxine Offredy

3月の終わりにさしかかり、ロンドンは少しずつではありますが日の入りまでの時間が長くなってきています。2学期の授業も3月半ばに終了し、後は2学期に履修した授業の課題提出と修士論文執筆のみとなりました。今回の第二回中間報告では、2学期に履修した授業を中心にロンドンでの大学院生活と、同期間に参加したロータリー活動を中心にお伝えさせていただきます。

学業面での成果

1 学期の課題作成について：

1学期に履修した授業はそれぞれ5,000字のエッセイで評価されます。一般的に学期が終了した後に2ヶ月ほど時間の猶予が与えられその期間内にエッセイの執筆を完了させなければなりません。私が1学期に履修した授業にもそれぞれ5,000字のエッセイが課せられており、「Concept, Theory and Issues: Education and International Development」では、ウガンダの難民キャンプにおける教授言語が異なることが初等教育に与える影響について、「Theories of Childhood and Society」では、フランスの非公認難民キャンプにおける子供の遊び場の現状について執筆しました。エッセイの結果は未だ返却されていませんが、これらのエッセイ執筆を通して、いかにアカデミック・エッセイを書くことが難しく労力を要することであるのかを痛感するとともに、多くの学友に助けられ仲間の大切さを痛感しました。

2 学期の授業について：

2学期は、「Planning of Educational Development (以下 PED)」と「Education, Conflict and Fragility(以下、ECF)」の2つのモジュールを履修しました。以下、それぞれのモジュールごとに詳しく説明をさせていただきます。

モジュール 1: PED

PEDは私が所属する国際教育開発学コースの学生が履修する目玉モジュールの一つであり、主に、国際開発分野におけるプロジェクトの計画、実施、評価の際に必要なとされる知識とスキルをケーススタディを通して学ぶモジュールとなっています。国際開発分野におけるプロジェクト・プランニングの専門家として現役で活躍されている多くのゲストスピーカーとともに、実践を通して知識とスキルを学びました。最後の授業では、国際開発分野における世界的な課題に対する新しい教育プロジェクトをプランニングするという課題が課せられており、グループで一から授業で学んだ知識とスキルを用いてプランニングし、プレゼンテーションを行いました。私のグループには、西アフリカ地域における干ばつ被害が教育に与える影響を緩和するための解決策を提示する課題が課せられ、その課題に対する解決策をグループで考案しました。私はプランニングにおける知識と経験を持ち合わせていなかったため、授業についていくのにとっても苦労しましたが、このモジュールを通して学んだフレームワークやグループワー

クの議論を通して、これから国際教育開発分野におけるプロジェクトを実施するのに必要な知識とスキル、加えて自信を獲得することができたように思います。

モジュール 2: EFC

EFC は、紛争あるいは紛争後復地域における教育支援を学ぶモジュールであり、数年前に新たに始まったモジュールではありますが、こちらも私の所属するコールの目玉モジュールの一つとなっています。このモジュールでは、紛争あるいは紛争後復興地域において、教育支援がいかにか安定的で長期的な解決策であるかについて、多くの過去に実施された、あるいは現在実施されているプロジェクトを通して学ぶことができたと同時に、一方でいかに教育支援がその他の三大支援(衣食住)項目に比べて優先順位が低く設定されており十分な焦点が当てられているのかについても学ぶことができました。近年では、紛争地域における教育活動の普及は、“西洋概念の押しつけ”と見なされる場合も多く(得に中東・西アフリカのテロリストグループにおいて)、過去数年前までは比較的安定的と見なされてきた現場の教育機関が、逆に多くの紛争の現場になっている(ボコ・ハラムにおける少女誘拐事件が顕著な事例)事例なども多く取り上げられ、将来的に紛争地域における教育支援に携わることを目標としている私にとっては非常に興味深く、また必須となる知識を学ぶことができたと感じています。

授業外活動について

1 学期を終え、大学院生活に慣れてきたとともに、学期間の休暇期間を利用して多くの課外活動に参加する時間的・心的余裕ができました。このセクションでは、報告期間中に参加した課外活動について報告させていただきます。報告期間中を通して計 5 回フランスの港町カレイにある難民キャンプ(公式的には難民キャンプとして認められていない)を訪問し様々なボランティア活動と研究活動に従事しました。ロンドンに引っ越し難民問題に関する多くのニュースや難民問題を研究している多くの友人に触発され、最初は現場を見てみたいという突発的な興味から始まったのですが、第一回の訪問の際にキャンプ内の子供たちを対象に活動している団体(Women and Children's Centre)でのボランティア経験を通して、難民の子供における教育活動に強い興味を持つようになりました。第一、二回の訪問は個人的なボランティア活動、第三回は Refugee Rights Data Project(以下、RRDP)における研究活動、第四、五回は修士論文執筆のためのフィールド調査の事前訪問とボランティアに従事しました。カレイの難民キャンプ(通称ジャングル)には、中東・アフリカの紛争や貧困から逃れてきた多くの方々が暮らしています。多くの人々は英国に渡ることを目標としており、現在(2016 年 3 月)およそ 5,000 人の方々がキャンプ内で生活しています。本キャンプは国連組織が運営に関与しておらず、またフランス政府からの厳しい圧力もあり難民の方々は様々な面で(劣悪な衛生環境、人権侵害、法的処置の不足等)非常に切迫した立場に置かれています。そのため、多くの方々は大型トラックや大型電車

に飛び乗ることで英国への渡航を目指しています。第三回目の訪問では、RRDP の学生研究員として難民の方々にインタビューを行いました。本リサーチ結果は、[「The Long Wait: Filling Data Gaps Relating to Refugees and Displaces People in the Calais Camp」](#)に纏められています。カレイの難民キャンプにおけるこれらの活動を通し、自身の修士論文のテーマを”カレイの難民キャンプにおける子供の現状”に定め、第四・五回目の訪問ではフィールド調査の際の協力団体との接触と関係性の構築を行いました。修士論文におけるフィールド調査に関しては、第三回の中間報告で主にお伝えさせていただきます。

受け入れ地区でのロータリーとの関わり

受け入れ地区(Edgware and Stanmore ロータリー・クラブ)での関わりに関しては、2016年1月20日(水)に実施された定例会に参加させていただき、ロータリアンの皆様の前でプレゼンテーションをさせていただきました。当プレゼンテーションでは、私自身の自己紹介と大学院での勉強内容、カレイの難民キャンプでの活動内容、また英国と日本の違い等といった内容について話しをさせていただきました。多くのロータリアンの方々が大学院での勉強内容とカレイでの活動に強い関心を示してくださり、様々な質問と有益なアドバイスをいただきました。第二回目のプレゼンテーションの機会も設定下さり、6月22日(水)に再度定例会に訪問させていただき、主に修士論文のフィールド調査の進捗に関してお話させていただく予定になっています。



プレゼンテーション後の様子
クラブ代表(右)と副代表(左)と共に



1130 地区の年次集会後の集合写真

また、定期的にカウンセラーの Maxine さんが声をかけてくださり、ロータリーのイベントに参加させていただいています。4月7日(木)には1130地区(ロンドン市内のすべてのロータリー・クラブ対象)の年次集会に招待いただき、受け入れ先ロータリー・クラブの皆様との交流と地区代表の方々のお話を伺う機会をいただきました。

今後の課題・目標

2学期の授業を終え、残りの大学院生活も後期に履修したモジュールのエッセイの執筆と修士

論文の執筆を残すのみとなりました。前回の中間報告ではまだ始まったばかりとっていましたが振り返ってみると授業はすべて終了し、これ以降クラス・メイトと共に授業を受けることがないのかと思うと非常に寂しく感慨深い気持ちになります。今後の課題・目標は、修士論文のフィールド調査に一本化されます。本フィールド調査では、カレイの難民キャンプに長期スタッフとして滞在し、ボランティア活動に従事しながら難民キャンプの子供たちとその親を対象にインタビューを通して論文執筆に必要となるデータの収集を行う予定です。フィールド調査実施に伴い多くの書類審査(特に私の場合は難民といった非常に社会的立場の弱い人々を対象にしているため倫理審査に時間がかかります)を通過しなければならず、多くの時間と労力が必要となります。また、フィールド調査を開始した後も、ボランティアとして活動しながら調査活動も同時並行で実施するため体力的にも密度の濃い時間になることが予想されます。カレイでのボランティア活動・研究活動を通して将来的にも難民の子どもの教育に関わっていきたいという思いを強く抱くようになった私にとって、本修士論文は非常に有益かつ実践的な経験になるため、必ず納得のいく修士論文を執筆したいと思っています。